

平成21年5月28日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期：2007～2008  
 課題番号：19520142  
 研究課題名（和文）北村季吟の古典研究の文化的・社会的影響力の研究……源氏物語研究の視点から  
 研究課題名（英文）The Influence of the Classical Studies by KITAMURA KIGIN upon Japanese Culture and Society, from Point of View of GEINJI MONOGATARI  
 研究代表者  
 島内 景二（SHIMAUCHI KEIJI）  
 電気通信大学・電気通信学部・教授  
 研究者番号：70170925

## 研究成果の概要：

北村季吟の偉大さは、古典研究の成果が「平和な国家の樹立」のために活用できると信じ、幕府の最高権力者の柳沢吉保と連携した点にある。最高の文化人と幕府の最高権力者が協力して開花させた元禄文化の真実を、『源氏物語』と『古今和歌集』の現代化という観点から文化史的に大胆に捉え直し、六義園という建物、数々の文学作品を、平安時代からの伝統の中に位置づける本研究は、江戸時代における古典文化復興の成功例を抽出したと言える。それによって、21世紀における新たなルネッサンスの開始の可能性を模索した

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学・文学

科研費の分科・細目：日本文学・(B) 古代文学

キーワード：国文学、文学一般、文学論

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 『源氏物語』研究だけでなく、わが国の古典文学のほとんどすべての領域において、鎌倉時代から江戸時代初期までの研究史を集大成し、なおかつ最も妥当な解釈を提示した卓越した古典研究者に、北村季吟（1624～1705）という人物がいた。ところが、彼の文化史的な位置づけはまだなされておらず、むしろ凡庸な研究者だったという間違ったイメージが一般に広がっている。これは、古典研究の意義を見失いつつある現代の国文学研究の危機である。

(2) 北村季吟を幕府歌学方（ぼくふかがくかた）に抜擢し、徳川五代将軍・綱吉と力を合わせて、理想の文化国家を創出するための政治的舵取りを果敢に実行した柳沢吉保（1658～1714）についても、世間では「悪徳政治家」「国家財政を浪費した張本人」などの誤ったイメージが流布している。これは、政治と文化のあり方に関する国民的な理解が、誤ったイメージによって左右されてしまった結果である。

(3) 時あたかも、『源氏物語』が紫式部

によって書かれてから1000年目の節目の年である「源氏千年紀」が2008年に迫っていた。『源氏物語』というわが国の誇る古典の傑作は、どのように現代人の生活に活用できるのかというメッセージを、世界に向けて発信することが強く期待されていた。

## 2. 研究の目的

(1) 『源氏物語』や『古今和歌集』などの古典文学の不朽の生命力は、「現代政治への応用」と「庶民が平和に暮らせる理想社会の建設の手段」にあると洞察した北村季吟の学問の全体像を明らかにする。

中でも、北村季吟の学問を最も高く評価した政治家である柳沢吉保との「友情」の実質を解明する。柳沢吉保は、駒込の地に六義園（りくぎえん）という大名庭園の最高傑作を造営しているが、その設計理念に北村季吟が深く関与していたことも明らかにしたい。

(2) 柳沢吉保は、自分の妻室たちを北村季吟に弟子入りさせて、和歌と『源氏物語』を学ばせた。その成果として、江戸時代きっての女性文学の代表作『松陰日記』が書かれた。これは、柳沢吉保の側室である正親町町子（おおぎまち・まちこ）の作品と伝えられるが、北村季吟の強力な指導で初めて可能となったものである。『松陰日記』の誕生に果たした北村季吟の役割を、正しく抽出したい。

(3) 柳沢吉保の正室である曾雌定子（そし・さだこ）が没した際に、吉保が詠んだ長歌など、現代にも通用する名作でありながら、研究対象となってこなかった作品が多数ある。それらを発掘し、正しく読解することで、北村季吟の文化的指導力の大きさを測定したい。

## 3. 研究の方法

(1) まず、これまで誰も注釈を試みておらず、本文校訂さえなされていない『六義園記』を、今後の研究の基礎とするために、信頼できる本文を整定する。ついで、北村季吟の学説と照応させながら、本文の正しい語釈と主題把握を試みる。そのためには、最も信頼の置ける『六義園記』の本文のある奈良県大和郡山市の柳沢文庫を訪れ、調査する必要がある。

(2) ついで、『六義園記』が高らかに宣言した「六義園」の造営理念を確認するために、六義園そのものの研究者と連携しつつ、園内に設けられた「八十八境」という名勝のそれぞれのネーミングに込められた文化史的背景を解明する。

(3) また、柳沢文庫に所蔵されている『松陰日記』の「草稿本」には、北村季吟の指導が端的に反映しているのも、その実態も調査する。あわせて、柳沢吉保が城主を務めた甲府、柳沢吉保と対立した水徳川光圀ゆかりの水戸や高松など、全国各地の図書館や文庫に所蔵されている写本等を調査する。それによって、柳沢吉保と親交を結んだ国文学者・儒学者・禅僧たちのネットワークを明らかにする。また、柳沢吉保の文化国家と異なる文化国家を目指した徳川光圀との相違点をも明らかにする。

(4) 以上を踏まえて、北村季吟と柳沢吉保が絶妙の連携で、江戸時代に開花させた元禄文化が、王朝の古典文学である『源氏物語』や『古今和歌集』の理念を現代化させた成果であるという、新しい文化史観を定義する。

## 4. 研究成果

(1) 新潮新書の一冊として刊行した『源氏物語ものがたり』は、世界に誇る日本文学の至宝『源氏物語』が、成立してから現在まで、どのように読まれ、文化史的に影響を与え続けてきたかを、九人の大学者の業績に即して解明したものであり、読書界にも好意的に迎えられた。

この書物の中で、北村季吟が継承し、柳沢吉保に伝えた「古今伝授」という儀式について、これが15世紀後半の応仁の乱によって引き起こされた戦国乱世の混乱の中で、平和的国家の再現を祈って、理想の人間関係のあり方を『源氏物語』『伊勢物語』『古今和歌集』の研究によって具体化し、継承しようとするものであることを明らかにした。

天下泰平の元禄時代こそ、『源氏物語』や『古今和歌集』の理想が再現した理想国家であり、そこに古典学者・北村季吟と、政治家・柳沢吉保の出会いの必然性があった。

(2) 私家版として刊行した『六義園記』注解』は、昭和4年の『東京市史稿・庭園篇』が犯した翻刻ミスや、無批判に継承してきたその後の研究を抜本から問い直し、信頼の置ける本文（柳沢文庫所蔵の『楽只堂年録』）を正確無比に翻刻し、難解な語句を正しく解釈し、執筆者である北村季吟が踏まえた和漢の膨大な古典籍の出典を明らかにしたものである。これによって、誰も読めなかった『六義園』の真実が明らかとなった。

この画期的な注釈書は、研究者のほか、六義園を管轄する東京都庭園協会や、六義園でガイド・ボランティアをしている人たちにも無料で提供し、初めて六義園の真実を解明した書として感謝された。

(3) 日本大学図書館に所蔵されている北村季吟自筆の『古今和歌集教端抄』は、柳沢吉保に対して献呈された写本の実物である。この本の存在は、従来も和歌文学の研究者には知られていたが、ただ『古今和歌集』の和歌の解釈に参照されるに留まっていた。この『古今和歌集教端抄』は、北村季吟が柳沢吉保に伝えた「古今伝授」の要であることが、理解されてこなかった。しかも、この写本に書かれている漢詩と和歌の6種類の分類基準である「六義」(りくぎ)それぞれの意味が、柳沢吉保が造営した「六義園」という庭園の名勝の直接の由来であることに気づいた研究者は、皆無であった。

私は、日本大学図書館蔵の『古今和歌集教端抄』を精査することで、「日本の神道(和歌)」と「中国の儒学(漢詩)」と「天竺の仏教(教典)」の三位一体を重層的に鼎立させることこそが、「六義園」の造営理念であり、その「三位一体」という開かれた文化観を柳沢吉保に教えたのが、ほかならぬ北村季吟であることを明らかにした。

(4) 北村季吟の指導を得て柳沢吉保の側室・正親町町子が完成させた『松陰日記』にもついても、その成立過程を具体的に解明した。『松陰日記』の清書本には「本文」しか書かれていないが、草稿本には「本文」に加えて、行間の「傍注」と、行頭の「頭注」が存在する。この書き方が、北村季吟の独創的な発明になる『源氏物語湖月抄』のスタイルの忠実な模倣であることを手がかりにして、『松陰日記』のボキャブラリーと文体が『源氏物語』とそっくりなのは、北村季吟による『源氏物語湖月抄』の講読指導があったからだということを論証した。

あわせて、『松陰日記』の主題が、和歌という「道の栄え」を出発点として「家の栄え」と「国の栄え」をもたらしたいという祈りであると把握し、それが北村季吟の思想に基づいていることも明らかとした。

また、柳沢吉保が正室の定子を悼んだ長歌についても、初めて本格的な注釈を試みた。

(5) 北村季吟が、柳沢吉保の要請に応えて柳沢家に仕官させた文人たちの業績も、詳しく調査した。これまでは、松尾芭蕉の『奥の細道』を清書した素龍(柏木儀左衛門、別名は藤原全故)にのみ研究者の注目が集中していたが、私は谷口大雅(元淡)・桜井元茂の2人にも注目し、彼らの著書である『百人一首拾穂抄補註』や『草庵集難註』を、師である北村季吟の学説との関連において読み解き、位置付けた。そして、北村季吟没後は、素龍・大雅・元茂の集団指導体制で、柳沢家の文化事業がなされたという強い確証を得

ることができた。

(6) 北村季吟の説いた「三位一体」の意義を明らかにするためには、「和歌」と並び立つ「儒教」と「仏教」の意味も解明しなければならない。それで、これまでほとんど研究が手つかずであった、柳沢吉保に関わる儒者たちの著作や、柳沢吉保と禅僧たちの問答集を文化史的に位置付ける作業も行った。具体的には、『風流使者記』、『勅賜護法常応録』、『故紙録』などの著作を、国文学研究と文化史的な研究の立場から、初めて本格的な検討を加えた。

(7) 本研究に従事していることが世間で話題になったためか、藤塚明直氏が所蔵している北村季吟自筆の『延宝七年正月試筆』という貴重な巻物を、貸与された。五十年ぶりに出現したこの巻物を、詳細に研究することができ、北村季吟が自分の学問研究の成果を現実の政治に応用したいと、若い時から願っていたことが判明した。

(8) 柳沢吉保がなぜ「悪人」「嫌われ役」という、不当な汚名を長く着せられることになった原因を解明すべく、「伝説の中の柳沢吉保」をも研究した。その結果、吉保のイメージを決定的に低下させたのは、浅野内匠頭の切腹と赤穂浪士の切腹の両方の実質的な責任者であると誤解されたことであるという結論に達した。

赤穂浪士を文芸化した最高の成功作は、歌舞伎の『仮名手本忠臣蔵』であるが、その作品構造と登場人物の性格を分析することで、赤穂浪士に討ち果たされた「吉良上野介」を舞台化した「高師直」(こうの・もろなお)に、ほかならぬ「柳沢吉保」のイメージも重なっていること、そして「高師直」に和歌の指導をして取り入った「兼好法師」に「北村季吟」のイメージが重なっていることという、二つの新解釈を提出することができた。

歌舞伎研究にも大きく寄与するものである。また、徳川光圀を善人とし、政治的対立者である柳沢吉保を悪人とする点についても、数々の歴史小説を題材として分析した。

(9) 以上の(3)から(8)までの研究成果は、二〇〇九年に笠間書院から刊行される予定の『柳沢吉保と江戸の夢……元禄ルネッサンスの開幕』として出版される。

北村季吟と柳沢吉保が、日本文化に果たした巨大な業績を正當に評価し直し、日本各地の写本や墓碑などを悉皆調査した成果として、写真や図版を多数挿入した書物である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計21件)

- ① 島内景二、武田信玄の和歌をめぐって、電気通信大学紀要、21-1・2、183-194、2009、査読有
- ② 島内景二、北村季吟と『湖月抄』、解釈と鑑賞、73-5、136-144、2008、査読無
- ③ 島内景二、六義園と藤原俊成、炸、107、2008、4-5、査読無
- ④ 島内景二、夢の回路としての俳句、玲瓏、0、108-109、2008、査読無
- ⑤ 島内景二、教科書の文学を読みなおそう、ちくま、451、20-21、2008、査読無
- ⑥ 島内景二、現代短歌という乗物、日本文学、57-11、66-75、2008、査読有
- ⑦ 島内景二、誤植は恐ろしい、炸、106、4-5、2008、査読無
- ⑧ 島内景二、大川は開化の海へ、オール読物、63-1、512-516、2008、査読無
- ⑨ 島内景二、釘本久春の俊成論、炸、101、4-5、2007、査読無
- ⑩ 島内景二、大田南畝の狂歌、炸、102、4-5、2007、査読無
- ⑪ 島内景二、川柳に見る俊成像・その1、炸、103、4-5、2007、査読無
- ⑫ 島内景二、川柳に見る俊成像・その2、炸、104、4-5、2007、査読無
- ⑬ 島内景二、川柳に見る俊成像・その3、炸、105、4-5、2007、査読無
- ⑭ 島内景二、思想の喚起力とその起爆剤、玲瓏、67、114-115、2007、査読無
- ⑮ 島内景二、旧仮名は踊る、短歌、54-12、114-117、2007、査読無
- ⑯ 島内景二、新発田藩家老・溝口長裕の伝記的研究(続)、電気通信大学紀要、20-1・2、2007、査読有
- ⑰ 島内景二、塚本邦雄作品研究……『日本人霊歌』その1、玲瓏、67、86-101、2007、査読無
- ⑱ 島内景二、閉塞の時代を生き抜いた狂歌師、週刊新潮、52-22、134、2007、査読無
- ⑲ 島内景二、危機意識としての短歌、短歌研究、64-8、102-103、2007、査読無
- ⑳ 島内景二、上一段の正しい使用法、短歌、54-10、80-82、2007、査読無
- ㉑ 島内景二、塚本邦雄作品研究……『日本人霊歌』その2、玲瓏、68、18-33、2007、査読無

〔学会発表〕(計1件)

- ① 島内景二、源氏研究を蘇らせるのは誰か、東京外国語大学博士課程多分野交流研究公開講演、2007・5・17、東京外国語大学

〔図書〕(計16件)

- ① 島内景二、筑摩書房、教科書の文学を読みなおそう、2008、160
- ② 島内景二、新潮社、源氏物語ものがたり、2008、223
- ③ 島内景二、ウェッジ、光源氏の人間関係、2008、390
- ④ 島内景二、電気通信大学島内景二研究室(私家版)、『六義園注解』、2008、144
- ⑤ 島内景二、河出書房新社、吉村昭、2008、116-125
- ⑥ 島内景二、勉誠出版、中世文学の回廊、2008、296-307
- ⑦ 島内景二、河出書房新社、半村良、2007、108-115
- ⑧ 島内景二、明治書院、展望現代の詩歌・第7巻、2007、1-40
- ⑨ 島内景二、おうふう、講座源氏物語・第6巻、2007、238-261
- ⑩ 島内景二、田端文士村記念館、芥川龍之介・多様な生・没後80年企画展、2007、3
- ⑪ 島内景二、新潮社、天馬翔ける・下、2007、644-653
- ⑫ 島内景二、文藝春秋、怒る富士・下、2007、356-365
- ⑬ 島内景二、講談社、啓順純情旅、2007、376-384
- ⑭ 島内景二、新潮社、むこうだんばら亭、2007、337-347
- ⑮ 島内景二、東京大学総合図書館、世界から贈られた図書を受け継いで……展示資料目録、2007、11-35
- ⑯ 島内景二、集英社、銭売り賽蔵、2007、464-471

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

島内 景二 (SHIMAUCHI KEIJI)  
電気通信大学・電気通信学部・教授  
研究者番号: 70170925

### (2) 研究分担者

無し

### (3) 連携研究者

無し